# ネパール山地に技術協力するには？ — R2. 細部②

人口急増で増産と出稼ぎが要請されたが、出稼ぎは金を得ても郷里の手不足を強め、その結果、一方で遠い高地の放任荒廃と集落附近の乱開発による減産や環境破壊を招く集落・土地利用の構造変化を招きつつ、他方で意思不疎通や伝統的な人材・気風の喪失で村の結束を弱め、村としてまとまった生態系を解体し、生活を脅かしつつある。

## 生態系の解体

人手不足による多作化が意思疎通を乱させたことと、生活体験の見比べでは盆踊り的な娯楽的な気風が失われたこととが相俟ち伝統継承を望む年配者と、それに軽蔑と交を無関心な若い層とに断層が生じ、村の結束が弱体化。

### 結束の乱れ

若い世代は、郷土に生きるための伝統的な知恵・知識に軽蔑を覚え無関心になり、その伝統を望む年配世代との断層が拡大しつつある。

- 若い世代は、郷土に生きるための伝統的な知恵・知識を学ぶ機会がなかったことを残念に思っている。
- 郷土生活に必要な知恵や知識にうとく若い世代に関心を持たなくなりつつある。
- 年配者の世代は「このままでは自分の息子達が伝統的な生活様式を知らなくなるのではないか」と思っている。
- 日Ｔｈａｍｅの言葉を思い出すが「何の役かは忘れたけれども年配者に教えを請うべきだ」という意識を抱いた。
- 人手不足ゆえ村民の力の集中が強まり、村全体のコミュニティーシンボルが喪失している。

高い山地での放牧の減退とグルカ兵生活の体験の影響、取り入れられた新しい作物や伝統的な人間関係や気風が失われつつある。

- グルカ兵生活を体験すると、体付きしっかりとした活力充実を思い出すことになるだろう。
- 若い山地での放牧の衰退は、グルカ兵になるための伝統的な人格形成の要素を失わせてきている。
- グルカ兵になった者は、体験談で村に戻ってきても、伝統的な気風を失っている。
- グルカ兵になった者は、体験談で村に戻ってきても、色の白さ、言葉づかいなどが、ブラブラしている。

人口増加は、それによる出稼ぎ故の手不足と相俟ち、遠い高地の放任荒廃と、集落附近の乱開発による減産や環境災害を招く、集落・土地利用の構造変化をもたらし、生活を脅かしている。

人口増加が、出稼ぎによる手不足で放牧衰退による高地の放任荒廃を来しつつ、増産の要請で集落附近の地表の放棄と森林の後退という乱開発を促がし、後者が飼料・薪・肥料の逼迫手不足を加重して減産を招きつつ、一連の環境災害で生活を脅かしている。

人口増加に人手不足で高地放牧が衰え山が荒れてきた反面、集落附近の過放牧で、地表の消耗、森林の再生困難、水源汚染による病人増加を招きつつある。

人口増加の上、人手不足になったため、高地放牧が衰え山が荒れる一面、集落附近の地表が過放牧化。

- 住民が以上の上、農耕の高地放牧が減退ので、新たな地表の森林が減退。
- 人手不足になったため、農耕の高地放牧が減退し、その結果高地の放牧者の数が減少。
- 人手不足から農耕の高地放牧が減退した。
- 高地の放牧が高山草地本来の役割を果たせなくなり荒れてきた。

村の構造変化

- 三世代が一緒に暮らす家族が多かったが、今は核家族が多くなり、三世代が一緒に暮らす家族は少なくなった。
- 食事の時間を新鮮な環境・明るい環境・日時を決め、共同で食べる習慣が定着した。
- 昔からの数十戸の集落の地区では、新顔の時地の多くなった。集落が広がるにつれて数百戸の地区が出来た。

集落附近の過放牧は、草地の消耗化、森林の再生困難、水源汚染による病人増加などをもたらした。

- 集落附近の過放牧で結果として草地化し、森林の再生困難。
- 過放牧の結果、集落附近の草地は消耗してきた。
- 過放牧の結果、水源汚染の原因となり、その病人が出てきた。
- 過放牧の結果、集落に出る薪は再生できなくなってきた。
- 集落に近い平地や森林には、茶畑が増えたが、過去や茶木が古くなり、荒れている。

森林が拡大された開地が集落から遠のき、飼料・肥料・薪の採取や施肥に手が回りにくくなり、ますます開墾地の遠い開発地に手作を上、土壌侵食を強めている。

- 地表が荒れて開墾地が遠くなるにつれ、飼料・肥料・薪の採取が困難になり、遠い開墾地で手作をする農民が出現。土壌侵食を強めている。
- 肥料・飼料の不足で、畑の地力が弱くなり、モンスーン雨期の豪雨で土壌侵食を増やすおそれ。
- 飼料用の木の実や葉を採取する場合、広葉樹の方が針葉樹よりも適しているので、もっと遠くの広葉樹の森まで出掛けねばならない。

地質構造に加え、無理な耕地化（傾斜地を刻苦し地表を改変した所）、水源涸渇、出稼ぎ、投入の肥料などが土壌侵食の原因である。

- 傾斜地・畑・耕地が土砂崩れ、傾斜地の地表が改変した。土壌侵食を強めている。
- 不適当な場所にまで開墾耕地が拡がり、土壌侵食を強めている。
- 傾斜地を開墾した為、耕作地までの距離が遠くなり、肥料・飼料・薪の採取が困難になり、土壌侵食を強めている。
- 地表の改変で、集落附近の水源が涸れ、遠い水源まで汲みに行かねばならなくなった。病気の原因となっている。
- 過放牧の結果、集落附近の水源が涸れ、遠い水源まで汲みに行かねばならなくなった。
- 出稼ぎ者が、投入の肥料などを買うために、家計の足しにしている。

人口は過ぐ30年間に急増期に入ったらしい。

- 1950年の平均世帯数は3.8の戸数だが、今では7.0戸前後に分裂傾向にあるようである。
- 低位部分の田がらいの耕地には、数十戸の集落が多い。

## 人口急増

人口急増で自給度が落ち、出稼ぎや移住が増えたが、出稼ぎで金を得ても郷里の手不足を強め、やりくりの多作化と減産を招き、人口過剰でありながら手不足とウラシンマで、住民は苦はかったと嘆く。

人口急増で基本的生活面の金産が自給できなくなり、出稼ぎや移住が増えたが、出稼ぎで金を稼いでも郷里は強力な人手を失って減産を招き、人口過剰でありながら手不足とウラシンマで住民は苦はかったと嘆く。

人口急増の基本的生活面の「産出」が産出量が到底自給できなくなり、今迄の出稼ぎを加えても食べて伸ばす苦力が足りなかったと住民は嘆く。

- 以前は村の人口がもっと少なかったので、自給自足できていたが、今は人口が増えたので自給自足ができなくなった。
- 食糧の不足の原因の多くは、人口が増えたことが原因である。
- 人口の絶対数は、世界一の中、人口密度は、インドの人口密度の半分程度の世界一である。
- 家畜は、ほとんどが、自給自足的に飼っていたが、今は、家畜の数が減少し、家畜は、食べて、食べて、食べて、食べてしまうので、家畜は、減少している。
- 住民は、金を稼ぐのも自分で出ないといけないが、世界銀行は、家畜は、食べてしまう。
- 「Ｔｈａｍｅの戦争とゲーロンは、戦争に戦争に戦争に、戦争ばっかり。自給自足は、ムリだ。」と嘆いた。
- 住民は、「昔は、苦はしかった。」と、現状を嘆いている。
- 出稼ぎやグルカ兵やその他の人口過剰でありながら人手不足である。
- 多くは、農業の、自給自足的な農地、とくに、Ｔｈａｍｅ地方の開発地である。

## ジレンマ

- 「家畜が、食べて、食べて、食べてしまう。」という住民の嘆。
- 家畜が、食べると、食べて、食べて、食べてしまう。
- 家畜が、食べると、食べて、食べてしまう。
- 家畜が、食べると、食べて、食べてしまう。
- 家畜が、食べると